

2017 年度 21 世紀かながわ円卓会議シリーズ②勉強会（企画会議）7/30 開催

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

◆グループ発表（討議者）＋コメント（司会／小川他）

討議者

三浦 知人（社会福祉法人青丘社 事務局長）

裴 安（ぺいあん）（NPO 法人かながわ外国人すまいサポートセンター 理事長）

加藤 忠相（株式会社あおいけあ 代表取締役・NPO 法人ココロまち 理事長）

原 美紀（NPO 法人びーのびーの 事務局長・港北区地域子育て支援拠点どろっふ 施設長）

名里 晴美（社会福祉法人訪問の家 理事長）

司 会

小川 泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

<三浦>

（馬場さんの話で）僕が印象に残っているのは、出ることを閉ざされた中で働く職員の感覚のほうが心配だと。出て行っちゃうこともあるけれども、パチンコが好きだったりとか、子どもを育てたころの思いを持って家に足が向いたりとか、そんなことをする行為を通じて、働く人たちが一人一人の思いに向き合う必要があるみたいなことは非常になるほどなと思わされました。とりわけ植木の 30 年の生活歴のある人が、庭に出て花が咲けるような専門的な技術をちゃんと提供して、周りに教えながら、自分の役割が毎日できたみたいな話は、むしろとてもステキな話だなと思って聞いていました。

それから、日本語指導のグループから、さらに外国人の居場所づくりをされている人からもコメントいただきまして、特に居場所づくりというところでは、一番まなざしだとか、人が本当に来ていただける思いがちゃんと伝わって、居場所ができるというための苦労みたいなものはあるよねという話を共有しました。特に、やはり支援するだとか、介護するだとかいう人が、ちょっと上から目線なものがあるわけで、お互いに居場所というところでいえば、共感とかね、居心地の良さとかというふうに考えると、そういうボランティアをしていますよとか、地域代表ですよという人たちが、逆にそういう来てほしい人たちの邪魔をしているという場面も多々この業界にはあるなということは今日感じました。報告になっていないかも。

<裴>

マイノリティとして入ってくる人たちは、いろいろなトレーニングを受けるけど、マジョリティとして引き受けるほうは何のトレーニングも受けないで、受けてやったじゃんみたいなところでおしまいに。資格取っているでしょう、あんた、仕事としてやればいいじゃないというところで終わっているというのは、すごく寂しい話だよ。やはりマイノリティの、別に外国人だけじゃなくて、高齢者であっても、一人親の人たちであっても、障害者であっても、マイノリティは本当にいろいろなことを努力している。みんなと働けるように、みんなと過ごせるように、頑張っている分、マジョリティ社会もやはりみんなと生きていかれるようなトレーニングをたくさんたくさんたくさん受けてほしいなと、そんな話を雑談でしておりました。

<加藤>

本当の意味でその人のつらい気持ちがわかることはまず人間はできないので、本当の意味まではわかり得ない中で、僕は専門性というものにしがみついて仕事をしていますが、結局、カテゴライズしたり、相手を診断したりすることによってさらなる分断を招いていて、自分がどんどんマイノリティ化されていくような社会になっていないのかなというのを感じるという話です。

...

広く知るのだけど、もっと身近であっていいんじゃないかなというところを、今、馬場さんが言っていましたけど、やって始めて味わうことができる、シェアできるという話をしていましたが、社会が失敗を許さないということをもっとすすめていますよね。

やまゆり園の問題も、おそらくカメラを付けろだとか、壁を築けだとかという話というのは、県の担当者が、それをやっておけば自分は失敗しない、怒られることはない、社会から責められることはない。でも、結局、人間というのは、失敗をして初めて成長することができるし、物を、例えば家を建てるなら失敗しないほうがいいし、金をつくるのは失敗しないほうがいいけど、おそらく今つくろうとしているのは社会の問題のはずなので、失敗する中で、その中で人材が育ってくるわけです。・・・ちゃんと人を育てるという意味で、失敗を許さないのではなくて、包容力とか包括力のある社会を育てるための人づくりをしていかなきゃいけないのじゃないかなと思いました。

...

たまたま多いほうに属していたというだけであぐらをかいていて、先ほどマジョリティの人の勉強は必要だという話をしていましたが、まさに偶然の人がマジョリティ、偶然マジョリティにいる人たちをどう勉強させるのか。マイノリティに関わっている人たちは、たぶん勉強しようとしたりとか、学びの場に出てこようとするのだけど、これを自然に地域の中で、学べる地域というキーワードはこれまでもありましたけども、神野さんの言葉の中に学べる地域を地域の中にどうつくっていくか。その学ぶというのは、こういった討議の場である必要はないと思うし、自然と知ることができる、発信をして、誰かが発信をすることを聞くのではなくて、こういう人いるよね。こういうことで困っている人、いるよねというのが自然と見えるのが大事ではないかなと思っている。

...

要するに分けられていることによる怖さというのはないのかなと感じます。だから、ただ、それは国がやってくれることではないですので、意識のある人たちがどんどん変えていかなくてはいけない。突破して示していつて、それをどう広げてくれるのかというのを、手を組まないといけない時代なのかなと思うので、キーワードとしては、自分の専門性からはみ出していくこと。

<原>

困るということ自体が見えなくなるということ。本当に今いろいろな事件が起きてますが、起きてからご近所の方々にインタビューすると、「あの家はみんな幸せそうにしていました」みたいなコメントが寄せられる悲しい事件がいっぱい起きていると思うんですけど。

...

合意形成というのが組織の中だととても難しい。やはり制度とか、施設と箱物、サービスができてしまうと、そこを変えていくというのはなかなか難しいし。でも、そこを、保育所をやられている代表の方は、やはり代表の意識はすごく大きいよねというお話もしてくださっていて、どんなに形を経てきても、変わらないものをしっかり持ち続けることだよという話では、やはり得られたものと失ったものというものを、しっかりバランス良く確認していくこと。さっきの馬場さんでいえば、虫の目、鳥の目の両方のバランス感覚というものをしっかり対

応しながら勝ち得ていくという、そこが合意形成ではないかということを私はこの3人から教えてもらいました。

<名里>

それで、早川さんが入ってくださっていたので、いろいろな人がその居場所として本当に集まりやすいような、気軽さみたいなことが大事で、そういうところにルールはなければいけないほうがいいというようなお話をいただいたりしていました。でも、そういう、なるべく敷居が低く、いろいろな人が集まってくると、本当にいろいろな人がいて、それを気にするかというようなところがすごく気になるような方とか、それはルールを決めないといけないんじゃないかというようなことをおっしゃる人がいるとか、やはりそれは人が集まったらそういうものですよねということではあるのだけど、でも、それはいいのよというふうに言ってしまうしないで、そういういろいろな不安とか心配とか、気になるところとかがある人のお話も誰かがちゃんと聞いて、それを特別なことじゃなく、みんなの問題としてというか、みんなでそこは共有しようねみたいにしていくことが大事ですよね、みたいな話になりました。

...

私のところのグループホームには、ヘルパーさんという、福祉のことをそんなにやってきたような人ではないような方が、100人ぐらいの方が関わってくださって、本当にこれからはそういう専門家でございますというような人じゃない人が関わって、一緒にやっていかないと、やっていけなくなるだろうと思うので、いっぱいいろいろな人が気軽に入ってきてくださいと思うのだけど、でも、やはりある意味、お仕事として入ってきてもらうと、ここは決まり事で、ここはこうしてくださいねということもやはり出てきてしまうところの、その案配が難しいというか、何でもオーケーというわけにもいかないところが難しいですねというようなお話もしました。

<KIF 清水>

地域に開くというのが、一つ、林さんもキーワードとして挙げられてはいましたけれども。ただ、開くというのが、その目の前のハード的な部分を開いていくことに加えて、そこにさらには早川さんが取り組まれているような、人と人というか、その地域の人をいかに巻き込んでいくとか、つないでいくというようなことが、もうさらに大事になってくるのかなということは感じました。

そこで、今日、当事者の皆さんにもお話いただいたようなところで、その人材を育てていくというところが、実はこれは、いわゆるただ専門職として何かの資格を取ればそれが人材になるわけではない。そうではなくて、いわゆる市民的感觉というか、市民性というか、言葉はあれなんですけど、専門性とその市民性を両方兼ね備えているような人材をいかに育てていくというか、育っていくという、自分が育っていくか。自分の課題でもあるのですが、そういったところがより大切になってくるのかなということは感じました。

<小川>

いろいろな施設を見ていたけど、資格があると思えるような人に出会ったことがないと。それくらい特養はひどかった。本当に。何がって。私、お風呂入るのに、裸でずらっと20人が並んでいるのを見たときに、これが老人ホーム？と思いましたよ。・・・そのときに私は福祉の専門性というものにものすごく不信を持ちましたね。それはこの業界に施設長として、あるいはこの社会福祉法人に関わりながら、ますますそれがひどくなってきた。

...

それくらい戦わないと、福祉の価値観というか、社会保障の価値観というかな。その価値観って何にも変わらないなと思っていて。その意味で、早川さんとか馬場さんとか、それからここにいる皆さんの実践とか、三浦さんもそうだし、加藤さんもそうだけど、やはり加藤さんが言ったように、率先してかち割っていかないと、それでどんな結果が出るか、それはわからない。けれども、のみ込まれるよりはやらなければならない。それがせめて自分ができる命を守るということだったらと思いました。

先ほど人材育成と、育成という言葉はあまり好きではありません。お互いに参加して気付いて、ああ、自分も考え直さなければ、学んだとか、得したとか思うことがあるわけで、お互い様だと思う。けれども、これから市民力、市民が持っている力、それから資源と、専門家と思う人がたくさんいるので、その人たちをどうやってうまく使うかですね。やはり持っていない、学んできたものは必ずそれぞれにありますので、その人たちがいかに機能してもらうか。それは行政マンであってもそうだし、政治家でもであってもそうだと思いますけれども、市民がどれだけそれを使うかが大事かなと思います。そこを超えていかないと、分断というのはやはりなくなならないかなと思いますので、せめてここに集った人たちとは一緒にそのことも含めて議論を深めていきたいと。

<KIF 水田>

本当にどうもありがとうございました。こういう少人数で、1 回目の大きい場での話し合いをもう一度議論しましょうというやり方は初めてチャレンジしまして、どんななるかなと思ったのですが、討議者の方々がそれぞれのテーブルでリードしてくださったし、また参加してくださった方々が自分の問題を抱えた中で話をしてくださったので、とてもいい情報交換ができたのではないかと思います。

私たちの財団のキャッチコピーの一つに、専門性と市民性をつなぐというのがあるのですが、一人の中に専門家と市民の要素と両方あると思いますので、自分がその複数の場面で複数の役割を果たすということをするのが、地域社会にコミュニティの力を取り戻すきっかけになるのではないかと思いますので、次回はもう少し人数を増やして、動く人たちを、響き合う人たちと共に時間を過ごしたいと思っておりますので、次回もぜひご参加ください。今日は本当にありがとうございました。

（以上）